

同時開催

大好きなトットリの「未来」を切り撮ろう! 新発見! 再発見!!

「鳥取フォトキャラバン」

小中高校生や地域の方々が身近な自然を舞台にデジタル一眼レフカメラで写真を撮影し、トットリの魅力を伝えていくプロジェクト「鳥取フォトキャラバン」の作品をそれぞれの会場で展示します。日本の原風景に溢れるトットリの魅力を子どもたちは「新発見」し、大人たちは「再発見」する世代と地域、文化と歴史をつなぐ「地域交流型」の取組みです。

鳥取フォトキャラバン 代表 水本俊也(写真家)



特別協力:キヤノン株式会社

TOTTORI LIVE YELL project

鳥取公演

JAZZ
×
演劇

観覧無料

全席自由



鳥取JAZZ/One Night Dream BIG BAND

ゲスト奏者 五十嵐明要

ジェイムス・T・アラキ

鳥取JAZZ × 鳥の劇場

●日時/12.26(土) 開演/19:00(開場/18:00)
●会場/とりぎん文化会館 梨花ホール

「スウィング・ジャパン」～日系二世ジミー・アラキの生涯と日本ジャズ秘話をめぐって～

原作/秋尾沙戸子「スウィング・ジャパン-日系米軍兵ジミー・アラキと占領の記憶」(新潮社刊)

みんなで観るライブビューイング

鳥取公演をライブビューイングでご覧いただけます。

●日時/12月26日(土) 19:00開始 ●会場/倉吉未来中心 小ホール

米子公演

合唱
×
演劇

公演は終了しておりますが、下記の「鳥の劇場 Youtubeチャンネル」のアーカイブより記録映像をご覧いただけます。



山陰少年少女合唱団 リトルフェニックス

岡野貞一

山陰少年少女合唱団 リトルフェニックス × 鳥の劇場

【第1部】山陰少年少女合唱団 リトルフェニックス 第15回定期演奏会

【第2部】「岡野貞一物語ふるさとのかなた」

～終わらない戦争、作曲家の祈り～

ライブ配信・記録映像の視聴について

公演当日はライブ配信を、公演終了後は記録映像をお楽しみいただけます。(鳥取公演のみ、記録映像の配信を行いません。)
詳しくは下記「鳥の劇場 Youtubeチャンネル」もしくはホームページ(<https://tottori-liveyell.jp>)をご覧ください。



ライブ配信 Youtubeチャンネル 「鳥の劇場 YouTubeチャンネル」よりご視聴いただけます。

【お問合せ】 TOTTORI LIVE YELL project 実行委員会 事務局
〒689-0405 鳥取県鳥取市鹿野町鹿野1812-1(鳥の劇場内) TEL.0857-84-3268

主催/文化庁 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 TOTTORI LIVE YELL project 実行委員会
実行委員会/特定非営利活動法人 鳥の劇場、公益財団法人 鳥取県文化振興財団、新倉 健、鳥取JAZZ、
山陰少年少女合唱団リトルフェニックス、一般財団法人 米子市文化財団、日本海テレビジョン放送株式会社、
株式会社新日本海新聞社、日本海ケーブルネットワーク株式会社、株式会社F.M.鳥取、
株式会社エムアンドエムドットコー、鳥取県地域づくり推進部文化政策課



主催/文化庁 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 TOTTORI LIVE YELL project 実行委員会



TOTTORI LIVE YELL Project

クラシック
×
演劇

ライブへのエール。
ライブからのエール。

オーケストラ・オペラ × 鳥の劇場

2020.12.26(土) 開演 16:00
会場/倉吉未来中心 大ホール

音楽×演劇で、
鳥取をもっと笑顔に。
もっと笑顔に。

TOTTORI LIVE YELL project

倉吉公演開催にあたって

クラシック音楽の 地産地消の可能性

作曲家・鳥取大学名誉教授 **新倉 健**

ヨーロッパでは小さな町にも、「おらが街のオーケストラ」や、「私たちの歌劇場」が存在し住民に愛されているとはよく言われることですし、私自身もヨーロッパに旅行する度にこの事を実感して羨ましく思っていました。しかし、日本は違います。東京をはじめとする大都市一極集中の波は巨大で、日本全国どの都市も金太郎飴のような同じ顔をした東京のコピー文化に感染してしまったかのような有り様です。このような中で鳥取ならではのコンサートを実現しようと企画したのが本日のコンサートです。第一部「鳥取で生まれたクラシック」では、世代も個性も異なる鳥取県在住の三人の作曲家が、世界初演を含む出来立ての管絃楽曲を発表します。演奏するのは鳥取県在住・出身者を中心としたプロ・アマ混成のスペシャルオーケストラです。三者三様のオーケストラの響きをお楽しみください。第二部は、歌と芝居、管絃楽で綴る「モーツァルト、四大オペラと人生」です。鳥の劇場による演劇、「鳥たちのオーケストラ」とも言えるスペシャルオーケストラ、そして鳥取の優秀な声楽家たちによる「おらが街の歌劇団」のコラボにより、鳥取県産のオンリーワンのクラシック・ライブをお届けします。どうぞ最後までごゆっくりとお楽しみください。



なぜ今ここで モーツァルトなのか？

鳥の劇場 芸術監督 **中島 諒人**

今回、モーツァルトの4つのオペラをていねいに見つめて分かったことがある。人間の苦しみが時代の変化を生み、その苦しみが生み出すということ。モーツァルトの生きた時代、経済の構造が変わり、市民（庶民）が経済力を持って生き生きとした生活を築こうとしていた。実質的に社会を支えている側からの異議申し立てだ。古い社会の課題が浮かび上がってくる。なんで貴族が偉いんだ？自由で生きるってどういうこと？教会の権威ってなんだ？なんで女はしいたげられる？芸術家は社会のちょっと外側にいて、違和感に敏感な存在だ。社会全体で大騒ぎになる数十年くらい前に問題を察知する。音楽の才能で貴族社会を駆け上がった一人の男が、その才能ゆえに古い貴族社会に違和感を持った。もっと自由でありたいと思った。その目に社会の矛盾がぼんやりと、段々くっきり浮かび上がった。苦しみと願いが新しい音楽を生んだ。今我々は苦しみと混乱の中にいる。コロナパンデミック、経済の先行きのなさ、人口減少高齢化、セクハラやパワハラなど古い社会の宿痾などなど。この苦しみは、新しい状況への願いとなって新しい表現を生むはずだ。楽しいから歌うのではない。苦しいから歌う。そして新しい希望が生まれる。



ライブへのエール。 ライブからのエール。

ステージを奪われた表現者たちがいる。
それでも、届けたい想いをずっと抱えてきた人たち。
いまこそ彼らに、観るというエールを贈ろう。
そして、私たちが気づいたはずだ。
泣いたり、笑ったり、歌ったり。
そんな時間こそが、生きることそのものだったと。
ライブへのエールを贈ること。
それはきっと、ライブからエールをもらうこと。
人とライブのエール交換が、
日本全国で、いま幕を開ける。

JAPAN LIVE YELL project

JAPAN LIVE YELL project

新型コロナウイルスの感染拡大により、この春、世界から突然「ライブ」が消えました。徐々に文化芸術活動は再開しているものの、未だ深刻な状況が続いています。

「JAPAN LIVE YELL project」(ジャパン・ライブエール・プロジェクト)は、文化庁、芸団協、そして全国27都道府県の文化芸術団体が連携し、私たちの暮らしにもう一度ライブを取り戻す後押しをする、緊急プロジェクトです。全国各地で、地域の特徴を生かした個性豊かなイベントが延べ500本以上展開される予定です。リアルな会場での参加だけでなく、オンライン配信を活用して多くの方にご参加いただけるプログラムも企画されています。

新しい生活様式のもと、全国各地の芸術家やスタッフ、文化芸術に親しむ愛好家・子供たちは、かつてないチャレンジに取り組んでいます。知恵を出し工夫を重ね、舞台の幕を開け始めています。ライブを愛する皆さんと、もう一度感動と喜びを分かちあうために。あらゆる立場の人々に、ライブでエールを贈るために。

ぜひもう一度、ライブの醍醐味に触れてください。きっと新しい出会いが見つかるはずです。リアルやオンラインでの参加を通して、魂を揺さぶるステージを届けてくれる表現者やスタッフへ、みんなでエールを贈りましょう！

◆ 名称
JAPAN LIVE YELL project
ジャパン・ライブエール・プロジェクト

◆ 参加27地域
北海道、岩手県、秋田県、山形県、埼玉県、東京都、神奈川県、新潟県、石川県、長野県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、広島県、愛媛県、高知県、福岡県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、沖縄県

◆ 期間
2020年8月～2021年3月

◆ 主催・協力
主催：
文化庁／公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
27都道府県の実施主体
協力：
劇場、音楽堂等連絡協議会／公益社団法人全国公立文化施設協会
公益社団法人日本オーケストラ連盟
※文化庁令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業

鳥たちのオーケストラ

オーケストラ・声楽メンバー

- ◆1stヴァイオリン：湯浅いづみ 芦原充 野口まつの 中野了 福田俊一郎 足木かよ 長坂拓己 野口友江
- ◆2ndヴァイオリン：竹田詩織 仁熊美鈴 矢木紀子 高橋美穂 三宅音楽 長原愛美
- ◆ヴァイオラ：棚橋恭子 鈴木大樹 多井千洋 七澤達哉 島田玲 植植藍子
- ◆チェロ：灘尾彩 一樂恒 時本野歩 中嶋寄恵 須々木竜紀
- ◆コントラバス：神庭智子 奥田敏康 中津浜麻美
- ◆ハープ：山地梨保
- ◆フルート：稲田真司 大野原愛
- ◆オーボエ：安田美和子 足立かおり
- ◆クラリネット：杉山清香 田中由紀
- ◆ファゴット：柿沼麻美 橋本美紀子
- ◆ホルン：穂山純果 渡部奈津子 穂山京子 小椋智恵子
- ◆トランペット：小林鴻 横山大輔
- ◆トロンボーン：清澄貴之 田中洋実
- ◆バストロンボーン：山田健一
- ◆チューバ：竹内亮平
- ◆ティンパニ・打楽器：武部良枝
- ◆打楽器：瀧 禎子 上萬恵 上萬寧音
- ◆チェンバロ：綿口裕美子
- ◆声楽メンバー
- ◆ソプラノ：佐々木まゆみ 竹内美咲 寺内智子 尾前加寿子 松田千絵
- ◆バリトン：西岡千秋 吉田章一
- ◆バス：小山雅彦
- ◆クナール：本池佳乃 白石睦 荒川望咲
- ◆合唱団「優喜」(男声チーム)

指揮者／大浦智弘

宮城県塩竈市出身。東京学芸大学教育学部を卒業後、同大学大学院を修了。ピアノを斎藤信子、須田昌宏、作曲を小林康浩、吉崎清富、指揮を松岡究、山本訓久、小林研一郎、スコア・リーディングとオペラ・コーチングを田島亘祥、レオナルド・カタラノットの各氏に師事。新国立劇場、びわ湖ホールをはじめ各地のオペラ団体や管弦楽団、合唱団等において副指揮者や合唱指揮者を務め、研鑽を積んだ後、数々のオペラ公演やコンサートを指揮している。2012年鳥取県鳥取市にて中村敬一氏台本・演出・新倉健氏作曲のオペラ「窓」の世界初演の指揮を務め、2014年宮城県塩竈市にて両氏作のオペラ「ボラーノの広場」の東北初演（演奏会形式）を指揮した。2015年には日立シビックセンター開館25周年記念事業「たち野」オペラ「マクベス」を指揮し、約1万人もの観客のもと公演を成功に導いた。近年はマニヤール／交響曲第4番、ステーンハンマル／交響曲第1番、ドヴァリョーナス／ヴァイオリン協奏曲等の日本初演を手掛けるなど、知られざる作品の演奏にも意欲的に取り組んでいる。現在、オーケストラ「エクセルシス」正指揮者、栃木フィルハーモニー交響楽団常任指揮者、オーケストラ・ドゥ・センダイ指揮者、浦和ユース・オーケストラ指揮者、東京農業大学OBOG管弦楽団指揮者、埼玉フィルハーモニー管弦楽団、町田フィルハーモニー交響楽団、麻生フィルハーモニー管弦楽団、愛媛交響楽団、市川交響楽団客演指揮者、国立音楽大学オペラ研究会指揮者、東洋大学混声合唱団常任指揮者、東京二期会オペラ研修所講師。



©Kazuki Endo

コンサートミストレス／湯浅いづみ

鳥取市出身、在住。3歳よりヴァイオリンを始める。岡山県作陽高等学校音楽科に実技特待生として入学、卒業。愛知県立芸術大学音楽学部器楽科卒業。選抜により、京都国際学生音楽フェスティバル2014に参加。第8回ベアテン音楽コンクール全国大会一般の部第1位受賞。サントリーホールブルーローズにて受賞者記念演奏会に出演。第3回鳥取県クラシックアーティストオーディション優秀賞受賞。優秀賞により鳥取市にてソロサイタルを開催する。また、鳥取市交響楽団とW.A.モーツァルト「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲K.364」をソリストとして共演。これまでにヴァイオリンを山川はるみ、井上民恵、入江洋文、白石禮子の各氏に師事。また、くらしき作陽音楽大学モスクワ音楽院コースにて教鞭をとっていたディアナ・ケメルマン氏やナジェージュ・トカレワ氏のマスタークラスや公開レッスンを定期的に受講。現在、全国各地で幅広い演奏活動を行う他、鳥取県内にて後進の指導や地域の文化振興活動にも力を注いでいる。三朝バイオリン美術館ヴァイオリニスト。とっとりチェンバーオーケストラ(TCO)メンバー。鳥取県立西高等学校外部指導講師。



鳥の劇場

出演者



中川玲奈 (モーツァルト研究会 部長)



中垣直久 (モーツァルト研究会 副部長)



安田茉耶 (オペラ研究会 マネージャー)



2006年設立。演出家中島諒人を中心に俳優や技術スタッフなど演劇人が、自分たちの力で鳥取市鹿野町の使われなくなった小学校や幼稚園の施設を劇場に変え、NPO法人として運営。演劇の力と常駐する専門家集団の力を核とし、現代演劇の作品の力と劇場という場の力を通じて、様々な社会的実践を重ね、全国、そして世界からも注目を集めている。「創る」「いっしょにやる」「試みる」「招く」「考える」「成長の支援」の6つのプログラムを事業の柱とし、コミュニティーの中に劇場と現代演劇があることの社会的な可能性をさまざまに模索している。



外観 2016年に鳥取市、鳥取県により改修



2008年から毎年開催している国際演劇祭「鳥の演劇祭」



学校でのワークショップの様子



障がいのある人といっしょに舞台を作る「じゆう劇場」

プログラム

第1部

「鳥取で生まれたクラシック」

『大山/神仏の狂宴』（改訂初演）

大山は中国地方で最も標高が高く、伯耆富士と呼ばれるほどの美しさに加え、様々な伝説が残る神秘的な山です。また「神仏混淆（神様と仏様が一緒に祀られている）」として全国でも稀な山であったそうです。神仏が徐々に姿を現す前半。狂気のごとく酒を酌み交わし、時に泥酔の様子を見せる中間部分。後半は散り散りに消えていく情景が描かれています。前半は不協和音が多用されていますが、後半にはそれが調和されているのも聴きどころです。

上萬雅洋

作曲家、編曲家。様々な音楽シーンでの作編曲を手がけ、ヨーロッパでも活躍中。オーケストラ、室内楽、ミュージカル、和楽器、吹奏楽、合唱等の作、編曲作品多数。鳥取市交響楽団団長など。平成25年10月に「交響曲第1番ニ短調」を、令和元年10月に「交響曲第2番ハ短調『霊峰大山【DAISEN】』」を発表し、好評を博している。作編曲は独学によるものだったが、2009年より鳥取大学大学院にて新倉健氏に師事。



『Synth Concerto No.1 -Ether-』（世界初演）

このライブエールコンサートの為に作曲させて頂いたオリジナルクラシック楽曲『Ether』（エーテル）は日本民族に馴染み深い3つの音階を使用し、新型コロナウイルスに打ち勝つよう希望を込めて、力強く立ち上がっていくような曲構成で制作いたしました！オーケストラの迫力ある生音と、きらびやかなシンセサイザーサウンドとの壮大で宇宙的な音のハーモニーをぜひお楽しみ頂けたら幸いです。

井谷優太

手足にフィジカル的な障がいがあっても音楽活動ができる方法を独自に確立し、シンセサイザーとサンプラーを自由自在に操り、音楽制作やライブ活動をしているマイノリティ・サウンドクリエイター。2015年に東京国際フォーラムで開催された「第12回ゴールドコンサート」で最優秀賞を受賞したことをきっかけに本格的に活動を始め、2017年には平昌パライベントへ招聘されるなど国内外問わず活動の幅を広げている。



『SONGOQAJ 2020(ソングカグ 2020)』（改訂初演）

「楽曲が分節される箇所をさすソングカグという語の原義は、人間の腕の肘でありそこから派生して川の蛇行の屈曲部を指すのにも用いられる。ワヘイに言わせれば、いくつものソングカグを通過しながら川を進んでいくことと、くりかえしソングカグ(楽節の終結部)を経由しながら歌を歌ったり竹筒に息を吹き込んだりすることは同じような行為なのである。」(山田陽一著「霊のうたが聴こえる〜ワヘイの民族誌〜」より引用)

新倉 健

1976年武蔵野音楽大学大学院作曲専攻修了。作曲を福島雄次郎、金光威和雄の各氏に師事。主な作品にオペラ「ボラーノの広場」、「madrigal」、「ゴング・エカサマ・ブダヤ」、「ケンタウル祭の夜」、朗読と室内楽のための音の絵本「よだかの星」「注文の多い料理店」など。また、NYタイムズ紙で好評され米国各地で演奏された「広島が言わせる言葉」、ドイツで出版された「ギター・ジャリ」など、その作品は海外でも高い評価を得ている。鳥取大学名誉教授。



第2部

「モーツァルト、四大オペラと人生」

あらすじ

どこの大学の大学祭で、オペラ研究会(オペ研)とモーツァルト研究会(モツ研)の合同企画として、モーツァルトの四大オペラを使ったガラコンサートのようなイベントが開催される。本番前日の最終リハーサル。二つのサークルの長年の立場の違いから、険しい空気になっていくが……。

『フィガロの結婚』（1785～86）

当時、革命思想の本と見られ発禁となったボーマルシェ作の同名の戯曲に基づき、ダ・ポンテがオペラ用の台本を執筆。階級社会への風刺を喜劇的に描いており、その内容は現在もなお解決されないジェンダーの問題にまで及んでいる。物語の舞台はスペインのセビリア。浮気者の伯爵を、夫人、召使いのフィガロと婚約者スザンナ、小姓のケルビーノをはじめ、結果的には全員がとっちめ、という騒動が描かれている。1786年、ウィーンのブルク劇場で初演、後年プラハの国立（現在ティル）劇場で上演され空前のブームを巻き起こし、その人気は現在も続いている。

演奏曲

1. 「恋とはどんなものかしら？」
2. 「伯爵とスザンナによる二重唱」
3. 「手紙の二重唱」

『ドン・ジョヴァンニ』（1787）

同じくダ・ポンテ台本によるピカレスクロマン（悪漢物語）。女たらしのドン・ジョヴァンニは、今日も新しい獲物を求めナンパ行脚に余念がない。ある夜、女性に夜這いをかけようとした時、女性の父親の騎士長が助けに駆けつける。そこで騎士長と剣を抜きあう羽目になり騎士長を殺害。これが引き金になり数々の悪事が露見、最期は、石像と化した騎士長がやって来てハデス（地獄）の業火に焼かれてしまう…という壮絶な物語。

演奏曲

4. 「手に手をとって」
5. 「ぶってよ、マゼット」
6. 「地獄墜ち」

『コジ・ファン・トゥッテ(女はみんなこうしたもの)』（1789～90）

ダ・ポンテの台本による最後のオペラ。ナポリの港町、とあるオープンカフェが舞台。「男女カップル2組と狂言廻し役の男女、計六名の男女が絡み、同じ場所、同じセットで一日の騒動の顛末を演じる」というイタリア古典喜劇の作法に忠実に則り描かれた作品。物語は、2人の士官がそれぞれの婚約者の貞節を競い合うシーンからはじまる。婚約者である2人の女性は姉妹。そこに、老哲学者ドン・アルフォンソが「そもそも若い女性の貞節なんて…」と焚きつけたところから「だったら試してみたら解るだろう」と一芝居打つことに…さて結末やいかに?というお話。

演奏曲

7. 「男たちに、兵士たちに」
8. 「どちらかという黒髪が」

『魔笛』（1791）

市民劇場のこけら落としのために依頼された、ジクシュピール（台詞を絡めた歌芝居）で、現代のミュージカル作品の雛形とも言える。物語は、いつとも何処ともわからない、お伽の世界。異国の王子タミーノは、大蛇に追われ気を失う。そこに夜の女王の侍女達が現れ、蛇を退治し王子を助ける。女王への報告に侍女達が去った後、不思議な男ババゲーノが現れる。王子とババゲーノはその後女王に会い、女王の娘パミーナ救出の旅に出る…という冒険。初演は1791年9月、その僅か2か月後にモーツァルトは病死。享年35歳。

演奏曲

9. 「愛を感じる男の人達には」
10. 「復讐の炎は地獄のように我が心に燃え(夜の女王のアリア)」
11. 「パパパの二重唱」
12. 「強い力が勝ったのだ」

作曲家/ヴォルフガング アマデウス モーツァルト (1756～91)

ハイドン、ベートーヴェンと並び、ウィーン古典派の三大作曲家と称される。ザルツブルクに生まれ父レオポルドから学び、幼いうちよりイタリア・フランスに度々演奏旅行を行う。ポロニアではマルティーニの指導も受けた。初期は前古典派や伊古典派等の影響も受けたが、中期には典雅なギャラント様式や管弦楽法の充実したマンハイム楽派に学び、これらを統合した洗練された独自のスタイルを確立、更に当時廃れていたバッハ以前の厳格対位法も有機的に採り入れ深淵な表現を獲得、「疾風怒濤時代」にあってロココ芸術の頂点を極め、歌劇をはじめとする舞台作品、宗教音楽や交響曲、協奏曲から室内楽、その他の器楽、声楽曲等あらゆる分野に名曲、傑作を数多く遺した。

